

ハイデルベルク信仰問答講解説教 4 1 「悪に悪を返さず」(2012年7月1日 礼拝説教)

【聖書箇所】

心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。(レビ19:17-18)

だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。

(ローマ12:17-21)

【説教】

今日は、十戒の第六戒「殺してはならない」に関する問答を讀みます。第四戒、第五戒が一つの問答であったのに対して、この第六戒は三つの問答を重ねています。そこにはどういう意味があるでしょう。

通常、「殺してはならない」は、よほどそういう罪を犯した人間でなければ当てはまらない教えだという考え方があります。確かにそうです。人を殺すことを経験する人は、ごく稀であり、普通に生活しているならば、そういう局面に出くわすこともほとんどないのであります。実に多くの人々がこの問題は無関係だと考えています。そしてこの戒めの前を素通りしてしまうのです。

しかし、今日の信仰問答をお読みになって、みなさんがお気づきだと思いますが、信仰問答はこの「殺してはならない」を単に人殺しだけに限定していません。問105、106を讀みます。ここには殺人という行為よりも、むしろその行為に現れてくる以前の状態、その殺人の根の部分を見ています。それはその行為の動機となる心の状態です。問106では、その殺人の根として「ねたみ、憎しみ、怒り、復讐心」を挙げています。そしてこれを「一種の隠れた殺人である」と記します。

これは十戒の拡大解釈と言われますが、しかし拡大、誇張しているわけではないと思います。確かに殺人という行為には至らない。しかしそれがあから行為にまで及ぶのであります。それがあから以上、行為になるかならないかは紙一重なのです。このような殺人の根を持っている限り、わたしたちは人を殺すかもしれない、ぎりぎりの綱渡りをしている。

そのことは信仰問答以前に聖書が明らかにしていることでもあります。マタイ5:21以下、また1ヨハネ3:15にも「兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおおり、すべて人殺しには永遠の命が留まっています」とあります。

このような「ねたみ、憎しみ、怒り、復讐心」は、誰もが抱くものです。生まれて今日までこういった感情を持ったことのない人はおそらくいないでしょう。それならば、ここにいる全員が隠れた殺人者であるということになります。誰もこの罪を言い逃れすることはできないのです。正当化できない。そのことを気付かせることがこの信仰問答の一つの目的であります。ですから、このように三つも問答を重ねて、この第六戒が決してわたしたちと無関係ではないことを示しています。

更に、この信仰問答に特徴的な問答が、問107です。ここでは単に殺さなければいいという消極的な意味でこの第六戒を解するのではなく、むしろ隣人を愛し、忍耐、平和、寛容、慈愛、親切を示し、「敵に対してさへ善を行う」というように、積極的に人を生かす方向へ向かっていることでもあります。これはこの信仰問答の特徴と理解してよいでしょう。それはこの後の問答にも表れていますが、「～しない、してはならない」という消極的戒めではなく、「すすんで～すること」そういう積極的解釈が十戒の戒めには必要なのです。そこまで踏み込んでいかな

ければ、わたしたちは本当の意味で神さまの戒めに生きることにはならないということです。

しかし、当然ながらこれができない。ですからこれはそんなに簡単な問題ではありません。極めて切実であり、現実的な問題です。そしてこのことをもう少し、現代に即した問題として理解するならば、例えば、自死の問題があります。これは年間3万人が当たり前になっている深刻な社会問題です。これも今日の信仰問答では問105で「自分自身を傷つけたり、自ら危険を冒すべきではない」という部分がこれにあたるかと思えます。神さまに造られたもので人は自ら命を絶つ唯一の生き物だと言われます。かつて教会はこれを厳しく断罪しました。墓を分けたり、葬りを拒否したりした。しかし現代において、そのようなことはしません。自ら命を絶つ者の心理的、精神的病理を理解してのことです。しかしこれはぎりぎりの発言であり、決して教会は自死を認めているわけではありません。家族の痛みも大きいのです。主のあがない、執り成しを祈らなければなりません。

ドイツの改革派の牧師であるアルフレート・ラウハウスのハイデルベルクによる説教では「自死」はもちろん、「安楽死」「中絶」「死刑」「戦争」の問題をこの問答のところで扱っています。非常に興味深いものがあります。教会では「中絶」の問題は、昔から反対の立場を示してきました。それが殺人であることは明確であります。しかしご存知のように「中絶」は後を絶ちません。何の罪の意識もなく、そのような過ちを人は繰り返しています。「安楽死」も倫理的に難しい問題ですが、本人や家族がそれを望み、積極的な治療、延命措置をしないで、なるべく苦痛をコントロールする仕方から自然の死に任せる受動的安楽死は認められるものです。しかし自然死に至る状況でもないのに、望むままに薬物などによって死に至らせる積極的な安楽死はもちろん認められません。

ところで、合法的殺人というものがあります。法律で認められる殺人です。それが「死刑」や「戦争」の問題です。信仰に照らした場合、教会はそれを肯定することはできません。しかし聖書を読むと、旧約聖書には死刑や戦争に関する記述が幾つも出てくるのではないかと疑問に思うかもしれません。しかしそのような死に値する罪を赦し、あがなわれるキリストの十字架と復活の御業が成された以上、わたしたち人間がそれに代わって、人の命をもって罪を償ったり、命を支配することは許されないのです。それは創造主と被造物の境界を越える越権行為となります。

先週、98歳で亡くなられた法学者の団堂重光さんはキリスト者であります。カトリックの信仰をお持ちで、イグナチオ教会で葬儀が行われました。彼は東京大学の名誉教授で、また宮内庁で天皇の相談役もされた方です。かつて最高裁の判事を務められ、当時は裁判の再審制度を重視しました。人を裁くことに慎重でありました。それはキリスト者であったという

ことを聞くと納得します。また死刑制度に対しても反対の立場で、死刑廃止論を訴えました。わたしはその著作を読んでおりませんが、死刑も戦争も同じだということを論じたそうです。

どうして同じなのでしょう。乱暴な議論は避けなければなりません。共に報復ということがあるのでしょうか。死刑制度は、ある意味、敵討ちです。本当ならば自分がその加害者を殺したい。でもそれはできない。だから法的に敵を討ってもらいます。報復です。そうでなければ被害者の気持ちは収まりません。極刑をもって償ってもらわなければ、理由もなく死んだ家族がうかばれないと多くの人々は考えます。それは被害者の感情を考えるとやはり当然なのです。わたくしも、正直もしそういう立場に置かれたら、非常に難しい。いやわたしは赦せるとは、今の時点ではなかなか言えないと思う。

しかしそれはやはり報復なのです。復讐なのです。「目には目を、歯には歯を」というレビ記24章にある聖書の言葉を思い起こす人もいらっしゃるかもしれません。これを同害復讐法と言います。聖書にもそういう教えがあるではないか。だから死には死をもって償ってもらわなければ。しかしこれは誤解です。聖書は復讐を認めているわけではありません。この御言葉は過度の処罰を禁じるものです。これはイスラエルの社会正義に関するものでありますが、被害者と加害者ではどうしても被害を受けた者の感情が強くなるのです。よく言われるように足を踏んでいる人は痛みを感じないが、踏まれている人は痛みを感じるのです。その被害者の意識に乗じて、過度の処罰が行われた。二倍三倍にして返したくなる。でも聖書の教えでは、目をやられたら目だけにとどめよ。歯を折られたら、歯だけにとどめよ。それ以上にやり返してはいけません。それが報復の連鎖となる。それを断つことがこの御言葉の意味、目的です。

そしてまさにこの報復の連鎖こそ戦争ではないでしょうか。ご存知のようにあのニューヨークのテロ事件以後、そこからイラク戦争へと発展していきます。戦争は終結しましたが、その報復の連鎖は今なお続いています。報復、復讐からは何の命の実りもありません。悪に悪で報いるならば、そこには悪しか残らないのです。ただ憎しみだけが増殖するのです。ではどうしたらよいか。この悪に勝つためにはどうしたらよいのでしょうか。

今日の信仰問答に「あらゆる復讐心を捨て去ること」とあります。本当にこれを捨て去ることができるのか。人間にはできません。しかし全能の神さまがこれを可能にされる。報復、復讐の連鎖を断ち切る道をイエス・キリストによって示してくださいました。キリスト御自身がその命をもって悪の連鎖を断ち切られたのです。主イエスは十字架の死に際して、「父よ、彼らをお赦しください」と祈られた。報復ではなく赦しの道を開かれた。もしそこで主イエスが十字架から降りて、神さまの御力をもって、自分を苦しめた者たちを滅ぼされたら、わたしたちの復讐心はなお増長されたに違いありません。でも主イエスはそれをなさらなかった。それよりも敵を愛し、赦す命を与えられた。このキリストによって、そのよみがえりの命の中で、わたしたちの復讐心は溶かされていくのではないのでしょうか。

ローマ12：19-20を読みましょう。なぜ復讐する必要がないのか。それは神さまがされる。正義をもって、公平に裁かれる神さまがすべてをご存知なのです。わたしたちが本当のこの裁き主を信じるならば、自分で裁くことからわたしたちはもっと自由になることができます。悪に対抗するのは悪ではありません。そこには悪しか残らない。「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」主が悪に打ち勝たれた真の勝利者です。このキリストの内にすべての勝利を見続けることが、そこにやがて命の実りをもたらすのです。お祈りいたします。